八代目團十郎の死

霜川遠志

新人物往来社

八代目團十郎の死

霜川遠志

新人物往来社

著者略歴
霜川遠志（しもかわ・えんじ）
1916年福岡県に生まれる。
日本大学国文科卒。劇作家。日本演劇協会会員。
これまでに「阿Q正伝」「藤野先生」（共に新国劇上演）などの舞台がある。
著書『はじめ地上に道はない』（フレーベル館）
『戯曲魯迅伝』5部作（而立書房）など。
現住所　横浜市鶴見区馬場5の19の1

八代目團十郎の死

昭和55年5月10日　初版発行

著　者　霜川遠志
発行所　菅　英志
発行所　株式会社　新人物往来社

東京都千代田区丸の内3—3—1　新東京ビル
電話代表（212）3931　振替東京6－151643

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。（印刷　明邦・製本　小泉）
（定価はカバー・帯に表示してあります）

目次

八代目團十郎の死　五
八方峠の怪　七
澤正よ　蘇れ　一〇三
澤正伝奇　一四七
あとがきに代えて　二二
解説　二二五

裝丁　鴇田幹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八代目團十郎の死

八代目團十郎の死

八代目団十郎は、人気絶世の盛り、嘉永七年八月六日（後に改元されて安政元年）三十二歳の若さで自らの生命を縮めた。遺書はなかった。ただ「うしろ富士　難波に残す　旅の笠」という辞世らしいものがあるだけである。それは、江戸をあとに大坂に来て、中の芝居の初日の直前、島ノ内の植久という、そのとき宿所にしていた金方（きんかた）（出資者）の二階で、のどを左から右へ四センチ　右から左へ三センチ　二ケ所を切って死んでいた。口に市川家の三升の紋入りの手拭を銜（くわ）えていた。

その死は謎とされている。それらしい原因はいろいろ上げられてはいるが……。

○借金で首が廻らなかった。

○自分の人気のあまりの凄まじさに空恐しくなって。

○市川団十郎という家系の重責に耐えかねて。

○父七代目団十郎（当時五代目海老蔵を名乗る）の妾ため（九代目団十郎の実母）との確執から。

○江戸の贔屓に無断で大坂興行に臨んだことへの自責から。

等々、いろいろ推測されている。そして、そのどれもが遠因になっていることは間違いないにしても、役者がその初日直前に自殺するなどということは、普通には考えられないことである。巷間いわれるように「役者は親の死目に会えない」ほど舞台が優先する職業で、熱が三十九度あっても舞台に立つ、また立っていると自然に病気も治るというくらいである。それほどの芝居の、しかも初日を目

前にして何故団十郎は死ななければならなかったか？……そこによほどの理由がなければならぬ。即ち、インパクトな事件が……。

一

〈さあさあ、寄ったり見たり、吹いたりシャボン玉。五色の玉のとりどりに、かけねのないのが評判の、玉屋、玉屋でござい！

また今年も、朝顔の苗や水売りに混って、シャボン玉売りの声を聞く季節になった。

投頭巾に袖無羽織、手甲脚絆に「たまや」と書いた箱を胸にかけ、筒の先でシャボン玉を吹き散らしながら歩く姿を見る。

嘉永七年。中村座、河原崎座、市村座、と江戸三座の並ぶ芝居まち浅草猿若町では、五月狂言の初日が近づいていた。

普通この五月狂言には、お家騒動ものや仇討ものが選ばれるが、中村座は既に三月大当りをとった、我童と粂三郎の「廓文章」を続演し、新たに勘弥の由良之助で「仮名手本忠臣蔵」が決まったし、また河原崎座も、六月から小団次を中心に「天下茶屋」と、人気絶頂の坂東しうかの「女鳴神」を決め、落ついていたが、市村座に陣取った八代目団十郎は、まだ狂言が本決まりになっていなかった。というのは、大坂から下って来ていた名優二代目中村富十郎が三月に引続いて一座しているため、その演目決定が難航していたのである。

まず、四世中村歌右衛門追善として「一谷嫩軍記」の陣屋が、養子の福助の熊谷で決まり、富十郎の出し物として、一世一代の「重の井子別れ」。大切(おおぎり)に所作事「六歌仙」まではどうやら決まった。しかし、団十郎初役の由良之助で予定された忠臣蔵を、先に中村座に出されたので、さて、どうしたものかというのである。しかも、中村座が五月五日初日なのに、市村座は五月十五日なのも不利であった。それに、座としては、興行的にも、団十郎と富十郎がかみ合う外題を選びたいのだが、どうも、この二人の仲がしっくりしないのである。

「どうでしょう、成田屋さん。思い切ってこちらも忠臣蔵で行きましょうか？」

帳元（興行責任者）の和泉屋和助は、もう何度となく木場の家に足を運ぶのだが、なにごとも慎重な団十郎がなかなか「うん」と言わないのである。和助はさらに言葉を重ねた。

「やはり、どうしても、旦那と天王寺屋のかみ合う外題を一つ出したいんで……」

天王寺屋というのは富十郎の屋号である。

「弥生狂言もそれで成功したんですから……」

「あれは成功かい？」

団十郎が冷たく言った。しかし二人はこの三月「三十三間堂」の平太とおりうで共演し、大当りを取っている。和助は自信を持って言った。

「もともと、あの狂言は大して面白い芝居じゃないが、旦那と天王寺屋がかみ合ったからあれだけの評判が取れたんじゃありませんか？」

「だがなァ和助さん。どうもおいら、上方役者は好きじゃねえ。一緒にやってても水と油のように弾

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

き合うんだ」
「旦那はそう思っていなすっても、客はその弾き合うところが……」
「そいつは一度だけで、二度目からは客は来ねえよ。舞台がしらけるからなあ」
「でも、なんですよ、旦那。あの富十郎は、大坂のご隠居から、八代目にいろいろ教えてやってくれと、頼まれて江戸へ下って来なすったということですぜ」
「それが、おいらどうも腑に落ちねえ。本当に大坂のお父つあんが、天王寺屋に団十郎を頼むと言いなすったのかどうか……」
「でも、本人が……」
「そりゃ、たしかにうめえよ、天王寺屋は……でもなあ、和助さん。こっちは江戸の、いや、成田屋の切れ味のいい荒事芸だ。それに、あのふにゃふにゃした上方の和事は合わねえよ。いや、三月にはなんとか合わせてやったさ。だが、辛気くさくっていけねえ」
「でも、ねえ、旦那。忠臣蔵の九段目でも出さなきゃ、旦那と天王寺屋が顔を合わせる舞台がないんでさ。これじゃ第一、客が承知しません」
「九段目か……でも、ありゃ元来、本蔵の芝居で、由良之助はほんのつき合いみてえな場だぜ」
「それでよござんす。旦那がその気でいなさりゃ、戸無瀬は天王寺屋のお得意だから、よろこんで出てくれますよ」
「うん、まあ、おれもせっかくの初役の由良之助だから、天王寺屋のようないい役者に周りを固めてもらうのは嬉しいが……」

「じゃ、それでよござんすね？」
「やる以上は、中村座の忠臣蔵に負けたくねえしな」
「じゃ、それで……」
和助はパンと横手を打って立上った。しかし、問題はその後で起ったのである。

「小浪を猿蔵はんやて？……」
団十郎の出した役割を聞いて富十郎が顔をしかめた。もう六十八歳になるこの老優が顔をしかめると、皺がいっそう深くなる。
「へえ。八代目の弟の猿蔵さんですが……」
「そら、あかんわ」
富十郎は一言のもとにつっぱねた。団十郎に負けぬ、この気難しい老優に和助は手をやいていた。
この二代目中村富十郎というのは「難波の太夫」といわれた名女形で、芸格も大きく、例えば「鏡山」の尾上と岩藤の両方のいける役者で、忠臣蔵九段目の戸無瀬などをやらせては無類のうまさを発揮する。団十郎はそのうまさを三月の狂言でいやというほど見せつけられていた。そのため、同じ舞台に立って芸を比較されるのがいやなのである。いや、怖いのである。そこを和助は、なんとか取持って、やっと団十郎を口説き落し、もう一歩というところまで漕ぎつけて今度は富十郎に突っぱねられたのである。
「小浪という役は、野郎頭のやる役やあらへん。そら、猿蔵はんは成田屋の可愛い弟はんかも知れへ

ん。でも、芝居の役割は情実で決めるもんやない。舞台の仕上りというもんを考えて決めるもんや。その歯車のどの一つが狂うても、舞台はキシンで嫌な音を出す。わては芝居が可愛いから、いかんもんはいかんと言うのや」

富十郎の言うことにも一理あった。九段目の小浪は、八段目の道行から続く役で、戸無瀬とは一心同体の大事な役であり、二人の呼吸がピッタリ合わねば、とても共演はできないのである。

「猿蔵はんは、ずうっと立役で来た人やてな……」

富十郎はちゃんと知っていた。猿蔵というのは、団十郎の四弟で、他にも母の違う弟たちがたくさんいるが、団十郎はなかなかの弟思いで、配役の時には、どの弟もが役不足にならぬように気を配り、いわば大坂にいる父海老蔵の親代りになっていた。

父の海老蔵というのは、七代目団十郎のことで、彼は女道楽の果て、十二人の子供を持っており、自分から「寿海老人子福長者」とたわむれに名乗るくらいで妾も数人持っていたが、今はその妾のひとり、おためと大坂に飛び出し、江戸の市川宗家は八代目にまかせっきりであった。が、今度たまたま富十郎に江戸へ下って貰い、八代目以外の息子たちにも、上方の和事の芸を教え込んで貰いたいと頼んだのは事実である。その富十郎と、肝心の団十郎が仲違いをしてしまったのだから面倒である。

「小浪を誰か他に変えて貰わん限り、九段目には、いや、忠臣蔵には出えしまへん！」

そういうと、くるりと向うをむいてしまった。和助は困り果てた。これから木場に取って返し、団十郎にそう伝えても「うん、そうか」と引退る成田屋でないことを知っていた。団十郎は、他の役者の下風に立つことを極端に嫌う。これは、幼い時から市川家の御曹司として甘やかされて育ったた

め、一たんこうだと言い出したら、てこでも退かぬ性質があった。またそれで通って来たのである。それに、市川家という江戸最高の門閥の頭領である団十郎には、上方役者などに負けてなるものかという自負心もあった。和助はそこで、もう一度、富十郎を攻めてみた。

「でもありましょうが、そこをなんとか眼をつむって……」

和助がそこまで言った時、富十郎の顔色がサッと変った。

「ほならこうしまひょ、成田屋はんが、どうしても猿蔵はんを小浪にということやったら、わては出まへん。いや、この五月狂言から名前を外さして貰いまっさ」

と、言い切った。

二

団十郎と富十郎の確執は、既にこの三月に始まっていた。その弥生狂言には「三十三間堂」のほかに「五大力」が出たが、市村座の三階の稽古場に出勤俳優全部が集まった顔寄せの日、

「おい。こりゃ、天王寺屋の座布団かい？……だったら席が違やしねえか？」

と、団十郎が言った。和助はちょっと戸惑ったが、直ぐには答えず団十郎の次の言葉を待った。確かに、狂言作者の机の左どなりに、富十郎の友禅の大座布団が敷いてあった。そこは、いつも立女形の尾上梅幸が坐る場所である。

「そこは、梅幸さんの坐んなさるところじゃねえのか？」

団十郎は、和助が困っているのを承知でそう重ねて言った。その時にはもう、梅幸も、当の富十郎

も部屋に入って来ていた。作者が正面の机に就いた。その右どなりが団十郎の席である。そこには柿色の座布団が置いてあった。柿色は成田屋の色である。

「おい、万吉。早く天王寺屋さんの席を拵えねえか、客人が困っていなさる」

「へえ……」

男衆の万吉は、あわててその友禅の大座布団を取上げたが、さて、どこへ席を拵えたものかとすぐには判断がつかなかった。第一、江戸では立女形でもこんな派手な大座布団は使わない。梅幸でも、茶の銘仙の小座布団である。万吉は富十郎の大きな座布団を抱えたまま、まだうろうろしていた。このとき鶴蔵がひょいと万吉の袖を引いて、

「ここがいい、ここへ敷きなよ」

と、助け舟を出した。そこは、作者の真向いの、鶴蔵たちの列の真中から一膝前へ出たあたりであった。それはちょうど、文字で書く番付の位置から言えば、中軸といわれるところに当ろう。しかし、江戸でもそんな坐り方はなかった。鶴蔵の機転である。とっさに独創的な機智の働く中村鶴蔵らしい措置であった。

「じゃ、始めましょうか……」

作者はこの微妙な空気を少しでも早く収めようとするかのように、すぐ本読みを始めた。

（やっぱり、親父さんの言ったように、世間知らずのお坊っちゃんだな……）

と、その時、富十郎は肚の中で思った。江戸へ下る時、団十郎の父の海老蔵から、息子をくれぐれも、と頼まれて来ていた富十郎であるが、考えてみれば、みなの前で恥をかかされたことになる。し

かし、年の功というのか、富十郎は表面おだやかに笑って済ませた。そして何くわぬ顔で傍の鶴蔵に言った。

「鶴蔵はん、去年の弥生興行の『切られ与三』では、大変な人気どしたやてな？」

「蝙蝠安のことですかい？」

「そやそや、ほっぺに蝙蝠の入墨いれて……『源氏店』では成田屋はんも、音羽屋はんも、まるで兄(あん)さんに食われはったそうやないか、ハハハハ」

「めっそうな。まだ、あっしなんか鳥の仲間とも、獣の仲間ともつかん、宙ぶらりんのコウモリ役者でさ、ハハハハ」

「どうしてどうして。フフ……団十郎はんかて、梅幸はんかて遠慮することァあらへん。役者は名前やない、舞台や、舞台が勝負だす、ハハハハ」

その聞こえよがしの富十郎の言葉には、明らかに皮肉がこめられていた。それがまた団十郎の癇に触わった。どうしたわけか団十郎は、初対面からこの富十郎を虫が好かなかった。

それでも二人は、平太郎と柳の精のおりうで同じ舞台を踏んだ。が、どうしても富十郎に食われるのである。いま人気絶頂の団十郎だから、客はその勝負を問題にしないが、明らかに団十郎は、演技の面で負けていた。さいわい、団十郎は若いし、端麗な容姿の上、颯爽としたいまを盛りの華やぎを持っていたので凌げたのである。同じライバルでも、これが梅幸やしうかだったら、同じ舞台でしのぎを削っても、むしろ楽しかったが……。

（チクショウ、狸親父め！）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com